

日本人を収容していたフィリピンの犯罪者収容所が、突然世間の注目を浴びた。建前とは別に、一般常識では考えられない施設内での収容者の私物所有や、賄賂や物品の販売、外部との通信・連絡が大っぴらに行われていたことに、いささか呆気に取られたというのが実感である。仮にも公の場で犯罪容疑者たる囚人が、係官に金銭を手渡して外部から品物を購入したり、施設内に「地獄の沙汰も金次第」とばかり、囚人が特別の待遇を受けていたなんて想像もできないことだった。さすがにこのニュースには、大概の日本人が驚いたようだ。

国家の役人たる係官が職業柄得られた特権と優位性を私的に悪用して、犯罪人や弱い立場の人間にゆすり行為や収賄を働きかけることなどとても信じられず、許されることではない。だが、現実には、このような私的な違法行為が途上国などでは潜在化していることも事実である。実際似たような行為に付き合わされ、迷惑を被った不愉快な事例が何度かある。

一例を挙げれば、今から半世紀近くも前のことである。ある途上国の国際空港出発に際して、出入国管理係官に賄賂の誘惑を迫られたことがあった。出入国管理事務所で旅券を提示し

スタンプ押印の出国許可を待っていた時だった。ところが、目の前の係官は一向にスタンプを押す素振りを見せず、旅券上の写真と私の顔を見比べては、溜息をつきニタニタしているだけだった。やがて搭乗時間が迫ってきて気持ちに焦りが出て来た。後ろに並んでいた出国者は別の窓口に移りもう誰もいない。航空会社係員が私の名前を呼びながら近寄って来た。私が名乗りを上げると、搭乗を締め切るので急いで欲しいとせつつかれたのである。「旅券を返してくれないので、先へ進めない」と応えた。その会話を耳にした係官は顔を近づけ「行きたいか」と尋ね、金さえくれればと言わんばかりだった。航空会社係員のイライラしている様子がはっきり見えた。そうして数分後、金をせしめられそうもないと諦めたのか、係官は突然やけくそのようにポンと力強くスタンプを押して旅券を突き返してくれた。慌てて機内に滑り込むことができた。

あの時、あの国はどうして出入国管理事務所でこういう違法行為を許しているのだろうかと思えたが、あれから半世紀の歳月が過ぎ、今のフィリピンの収容所も、当時のあの国と似たり寄ったりだなあと途上国の現実に諦めのようなものを感じている。

エッセイスト 近藤 節夫